

資料 A は言い回しや諺を例にとりながら、言葉は時代とともに変化するが、言葉の使い捨て感が強まっている現代において、どんな表現が生き残るのかは、日本語の文化を考えれば少々不安だ、と述べている。一方、資料 B では、日本人の言語能力について、書く力、読む力、話す力、聞く力のいずれにおいても低下していると答えた人が約 6 割、もしくはそれ以上であることが注目される。

私も現代において、日本人、特に中年以下の日本人の日本語力は低下していると考える。その中でも若い人々の日本語力の低下は著しいと思う。その理由としては、現代の教育が日本語を以前に比べ重視していないこと、テレビ番組に代表されるような現代の享乐的風潮、国際化の中であまりにも英語偏重になっていることがあげられる。

確かに、資料 A も言うように、言葉は時代とともに変化する側面はあるだろう。しかし、現代の日本人はあまりに日本語というものを軽視しすぎているように思う。日本人は母語である日本語によって思考するのであるから、「日本語を使って考える力」とは思考力であり、「日本語力」と思考力は直結する。日本語の能力が低く、単語の数が貧弱では、日本語を通して事態を正確に理解することも表現することもできない。日本語力が低下すれば、

思考力の低下につながっていく。例えば、狂牛病に的確に対応できなかった日本政府の問題、電力会社の原子炉のヒビ割れ隠蔽問題の根本の原因は、実は当事者達の思考能力の低下にあるのではないだろうか。また、大学生の読書離れの根本には、現代に必要な日本語力が高校卒業までに養成されていないという現実がある。

日本人は日本語によって思考する。日本語の精密化を図ることなくして、どうしてこれらの国際化という激動の時代に立ち向かうことができるのだろうか。日本語によって事態をできる限り正確に理解し、日本語によつて的確に表現できる力を養成せずに、例えば外国語をうまく使おうとしても、可能であるはずがない。従って、文部科学省の提案している「ゆとり教育」や、日本語の時間を減らして、英語を幼児期から導入する計画は見直すべきである。すなわち、日本語教育により一層力を入れるべきである。また、我々自身も母語である日本語自体の重要性を再評価すべきであると考える。

(句読点とも 969 字)